

## フィリピン・カピス州ロハス市での調査のための手続き

東賢太朗<sup>1</sup>

調査期間： 2002年7月～2003年12月

国／地域： フィリピン／カピス州ロハス市

調査テーマ： Belief and Practice of Magic and Religion in a Local City in the Philippines: From the Case of Roxas City, Province of Capiz

事例の特徴： 首都マニラの研究機関に客員研究員として所属しながら、地方都市での長期フィールドワークを行ったこと

### 1. 準備期間 (2001年～2002年)

学部在籍時1997年に交換留学生としてマニラに1年間、修士課程在籍時1999年と2000年に調査のためにロハスに各1カ月、博士課程に進学後2001年に調査のためにロハスに1カ月、それぞれ滞在していた。その期間に得た情報と経験が、長期調査準備のために大きく役立った。

フィリピンでの長期調査に際しては、他の研究者の多くがマニラの研究機関に客員研究員として所属し、47(a)(2)という研究者に発行される特別非移民ビザの身分で調査を行っていたという情報を事前に入手していた。

研究機関の選択については、国立フィリピン大学ディリマン校の第三世界研究所 (Third world Studies Center, University of the Philippines Diliman) という候補もあったが、学部時代に交換留学生として在籍していたのが私立アテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila University) であったため、人脈や利便などを考慮に入れて、同大学のフィリピン文化研究所 (Institute of Philippine Culture) を所属機関として決定した。

フィリピン文化研究所では、常時、フィリピン国内外からの客員研究員 (Visiting Research Associate) の応募を受け付けている<sup>2</sup>。私は、2001年10月ごろより応募に必要な書類等の準備を開始し、同時期に同研究所の客員研究員担当スタッフとのE-mailを通じてのやり取りも開始した。必要書類<sup>3</sup>のうち、もっとも懸念していた調査資金の証明書について、2002年度より財団法人日本科学協会の笹川科学研究助成に内定したため、その証明書を提出することにした。2003年度以降も調査は継続する予定だったため、その期間の調査資金として、日本育英会 (現学生支援機構) の受給証明書も提出した。2002年4

---

<sup>1</sup> 宮崎公立大学人文学部専任講師

<sup>2</sup> 詳細は同研究所Websiteを参照のこと (<http://www.ipc-ateneo.org/node/17>)。

<sup>3</sup> 必要書類は、以下の5点。

- ・Research proposal, including the tentative timetable;
- ・Certification of source of research funds and the approved budget;
- ・Curriculum vitae;
- ・Certification by the home institution of one's status there; and
- ・Letter of recommendation from the immediate supervisor (applicable only to graduate students).

月にすべての書類を郵送提出後、2002年に5月に同研究所より、受け入れ決定を知らせる通知がE-mailで送られてきた。

フィリピン文化研究所への所属には、最初の6か月間は10,000ペソ、その後6か月の延長ごとに7,500ペソの費用がかかる。所属によって受けられるいくつかのサービスのうち、私にとってもっとも有益だったのは、ビザ取得のための書類作成サポートや代行・送迎サービス、および客員研究員としてのID発行と、それにとまなうアテネオ・デ・マニラ大学の図書館等の施設利用であった。

なお、この準備期間には所属機関への応募と並行して、調査計画の立案はもちろん、在籍していた名古屋大学大学院文学研究科での各種手続き、航空券の予約・購入や長期調査期間の生活と調査のための必要物品の用意、マニラやロハスのインフォーマントや知人・友人への連絡等も行っていった。

## 2. 渡航期間（2002年～2003年）

### 2-1. 首都マニラでの開始手続き

2002年7月18日にマニラに到着した。47(a)(2)ビザの取得手続きはマニラ到着後に行うことになっていたため、入国時はパスポートのみの観光ビザ資格で入国した<sup>4</sup>。到着後、すぐに長期調査を開始するための準備に着手した。まずフィリピン文化研究所のスタッフのサポートを受けながら、47(a)(2)ビザ申請のための必要書類を作成し、また調査資金である研究助成の証明書の翻訳なども行った。

すべての必要書類を提出した後、47(a)(2)が発行されたのは8月28日であり、実に40日ほどを要した。ビザ発給と同時に、ACR（Alien Certificate of Registration）という外国人登録証も発行された。その登録証をフィールドに持っていく代わりに、紛失を避けるためパスポートはフィリピン文化研究所に預けていくことにした。

ビザ発行を待つ期間は、調査計画やプロポーザルの見直し、フィリピンの国語・公用語タガログ語とロハス市の地域言語ヒリガイノン語の学習、またアテネオ・デ・マニラ大学やフィリピン大学に所属する研究者や大学院生との交流に費やした。同研究所への所属費用も、その期間中に支払った。滞在期間中は、当初はアテネオ・デ・マニラ大学構内の宿舎に宿泊していたが、予想外に期間が長く費用がかかったため、学部在籍時のフィリピン人の友人宅に許可を得て滞在することにした。

### 2-2. ロハス市での調査開始時

47(a)(2)ビザ取得後、国内航空券の予約・購入などを終え、9月初旬に調査地ロハスで長期調査を開始した。その際には、特に必要な公的手続きはなく、前もって連絡を取り合っていた友人宅で調査生活を開始した。滞在した家がある集落内に、偶然バランガイ（最小の地方自治単位）のキャプテンが居住していたため、今後長期滞在することと調査の目的などを伝え、一応の挨拶は済ませた。また、地域言語であるヒリガイノン語の言語学習のために、近隣の幼稚園の教師に、2時間／週3日のヒリガイノン語のチューターを依頼し

---

<sup>4</sup> つまり、観光ビザを47(a)(2)ビザへと変更するということである。

た<sup>5</sup>。

2003年4月から5月にかけて、日本での在籍先である名古屋大学大学院文学研究科での各種手続きと、日本学術振興会特別研究員等の各種申請のため、一時帰国をした。

その手続きのために、2003年4月10日に、ロハスよりマニラに戻り、フィリピン文化研究所のスタッフのサポートを受けて、入国管理事務所で ECC (Emigration Clearance Certificate) という出国許可証明証と SRC (Special Return Certificate) という特別帰国許可証を取得した。その際、先述の ACR は入国管理事務所に預け、再入国の際に受け取りに来る必要があることを告げられた。聖週間の調査のため再びロハスに戻った後、4月20日にロハスよりマニラ経由で日本に帰国した。日本での用件をすませた後、5月27日に日本よりマニラに再入国した。5月30日にフィリピン文化研究所のスタッフのサポートを受けて、入国管理事務所で ACR 受け取りの手続きを行った。

なお、ロハスでの調査期間中、資料調査等の目的でマニラに戻ったが、その際に特に公的な手続きなどを行う必要はなかった。

### 2-3. ロハス市での調査終了時

ロハスでの長期調査終了時には、特に公的な手続きなどは行わず、お世話になったインフォーマントや知人・友人への挨拶回りと、Despidida と呼ばれるフィリピン特有のお別れ会を開催した。Despidida の主催は出発する本人側であり、パーティーのための飲食費用はすべて本人が主催する。私の場合は、200人以上を招待し、飲食合計で20,000ペソという莫大な額を負担することになった。

### 2-3. 首都マニラでの終了手続き

長期調査にかかわる滞在を当初の予定通り2003年12月で終了するために、ロハス市での調査を完了し、11月24日に再びマニラに戻った。11月27日にフィリピン文化研究所のスタッフのサポートを受けて、一時帰国時と同様、入国管理事務所で ECC と SRC を取得した。すべての手続きを完了し、2003年12月5日、最終的にマニラより日本に帰国し長期調査を終了した。

(2009年12月1日作成)

---

<sup>5</sup> 報酬は、150ペソ/1時間。